

笑顔咲く収穫祭

多くの来場者で賑わう模擬店



産直野菜の販売コーナー

庭道部が作り上げた「庭の美」に見入る来場者＝文化学術展で



笑顔と共に「こたわりつくね」をお勧め



「桃のシロップ煮」を販売する学生たち



熱帯作物学研究室の展示を笑顔で紹介する留学生＝文化学術展で



実りの秋を広く地域の皆さんと分かち合う東京農業大学収穫祭が、北海道オホーツクキャンパス(10月6～8日)、世田谷キャンパス(11月2～4日)、厚木キャンパス(11月3、4日)で盛大に催された。学科の名称変更や改組で6学部23学科となったから初めての開催。学生たちが丹精込めて用意したさまざまな味覚や体験企画、研究成果の発表に、1年間楽しみに待っていた大勢の人が集い、笑顔が咲いた。

実りの秋、分かち合おう

世田谷キャンパス

引き継がれる「誇り」と「財産」

世田谷キャンパスの収穫祭といえば、蜂蜜と味噌。味と品質の確かさを全国20以上の蔵元の逸品ばかり。国産原料を使い、無添加や伝統製法にこだわった品ぞろえで、家族や友人同士で多くの種類を買い求める姿が目立った。研究棟の新設工事のため例年より大幅に規模が縮小されたが、そのぶん賑わいの密度が高まり、熱気も上がる。その人波

「国産の蜂蜜は嬉しい。毎年まとめ買いして1年使います」と話す地元世田谷区の年配の女性はミツバチ研究会の売り場へ。午前9時30分、すでに長い行列だ。醸造科学科統一本部の味噌・醤油の売り場も朝から盛況が続いた。販売

しい食材が愛情込められたメニューとなつて並んだ。ほのかな酸味を味わう「すんきそば」は、信州木曾の漬物「すんき」をトッピングしたもの。学生は地元を訪ね、赤かぶの葉を乳酸発酵させる製法を学んだ。

「桃のシロップ煮」は規格外の桃を生かそうと試行錯誤した。「こたわりつくね」の主役は鶏肉ではなく、じつはつなぎの米粉だ。米粉の利用拡大のために考案したという。栃木県内の畑で種から栽培した葉付き大根は、連日朝採りで直送し

販売された。

2、3面にも
関連記事

厚木キャンパス

実学主義の「実り」を共有



神奈川県厚木市にある農学部厚木キャンパスの収穫祭は、今年で19回目。「希望芽吹く」農の祝祭」をテーマに開催された。



①長蛇の列のダイコン畑を交通整理する学生
②狙いどおりのダイコン、採れたかな？

込めて育てたダイコン3000本だ。その収穫体験をするために、11時開場にもかかわらず9時半から並び始めた。今年は台風被害が心配されたが「たくさんの方に収穫してもらい、調理して味



東京農大の教育理念である実学主義を一般の方々と共に共有する機会として、学生にとって実りある収穫祭となった。

オホーツクキャンパス

夜空に咲く30周年記念の花火

学生たちの最大イベントである「生物産業学部開学30周年記念・第30回オホーツク収穫祭」が10月6日(土)～8日(月)の日程で開催された。今年の統一テーマは「農力(Our abilities)」。北海道オホーツクキャンパスの学生たちが持っている個性豊かな能力(農



【北海道オホーツクキャンパス学生部長・南和広】

TheNEWS
東京農大
「生きる」を支える
TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE 1891

東京農業大学
世田谷キャンパス 大学本部
大学院・応用生物科学部
生命科学部・地域環境科学部
国際食料情報学部
厚木キャンパス
大学院・農学部
北海道オホーツクキャンパス
大学院・生物産業学部

4月・7月・11月 発行

編集 東京農業大学学長室
〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
<http://www.nodai.ac.jp>

- ②「研究室から」相手を理解するとは「下に立つ」こと……………
- ②東京農大 東方経済フォーラムに初参加……………
- ③「総研ニュース」新しい「栄養強化米」の開発・実用化へ……………
- ③「活躍する卒業生」校長先生「兄弟」……………
- ③アメリカ南部スタイルの「こだわり食材」朝食……………
- ③「世界学生サミット」加納さん 東京農大プレゼンター……………
- ④全日本女子駅伝4位 2年連続シード権獲得……………

世界大学 2019 年版
THE WORLD UNIVERSITY RANKINGS 2019
東京農業大学
「世界1001+」カテゴリ
英教育専門誌「The Times Higher Education」による2019年版「世界大学ランキング」が発表(上位1258校)され、東京農大が日本の大学103校の一角として「世界1001+」カテゴリにランクイン。これは2万数千以上ある世界の大学の上位約5%に相当する数値で、日本の私立大学としては堂々の16位となりました。

研究室
から東京農業大学大学院
国際農業開発学専攻博士後期課程2年
農業開発経済学研究室

五野 日路子さん

「ここしかない！」—国際協力の活動をしたいとの思いで国際農業開発学科で学び、大学院に進むと同時に青年海外協力隊に参加した五野日路子さん。アフリカ・マラウイの農村での経験と、今後の目標などを聞いた。



村落開発普及員として活動したアフリカ・マラウイの村民と一緒に写真に納まる五野日路子さん(右)

五野さんは、「国際協力の現場で活躍できる人材を育成する」という学科の理念に、まるで天啓を受けたかのように、瞬間的に「ここしかない!!」と思ったという。そして、東京農大の国際農業開発学科に進学。卒業後は青年海外協力隊に参加すると、五野さんは決

「マラウイにおける農村生計と社会的保護政策の影響」について「一般的に、「政策」の影響を明らかにするには、平均的な傾向を捉えるために国レベルの統計データを用いた大規模な計量分析を行う。しかし、それだけでは、異なる条件を持つ地域の特徴や、実際に政策の恩恵を受ける世帯の変化

アフリカ農村を豊かにしたい

五野さんは、幼い頃から海外に強い興味を抱いていた。小学5年生の時に香港を訪れ、そこで見た現地の状況に衝撃を受けて、「国際協力」という仕事が将来の視野に入ってきた。

「その頃はまだ香港が中国へ返還される前でしたが、生まれて初めて国内における深刻な貧富の差を目の当たりにしました。さらに、やがて街中とは対照的に、山間部では電気も上下水も十分ではない現状をみました。また、私と同じ年もしくは小さな子供たちがいたるところでトイレ用のちり紙を売っている姿に強い衝撃を受けました」

その後、ホームステイや国際交流事業を通してイギリスやアメリカ、オーストラリアの人々との異文化交流を数多く経験していくが、やはり忘れられないのは香港の記憶だった。「貧しい人たちのために何ができるのかを考えるようになった。そんな中、青年海外協力隊のことを知り、たどり着いたのが農大の国際農業開発学科でした」

五野さんは思いをかなえ、マラウイの村落開発普及員(現・コミュニティ開発)として2年間活動した。現地の農村世帯が抱える現状を目の当たりにし、どうすれば問題を克服する手助けができるかを模索する。

「配属先であった農業省(地方開発事務所)の仕事を通して、貧しい世帯への支援や脆弱性を克服するための手助けとなる政策の重要性と問題を考える機会を得ました。あの2年間の経験が、大学院への進学と、現在の研究テーマ

マラウイの子供を抱っこして笑顔のスナップショット
⑤留学生たちと談笑する五野さん(左)

最後に、後輩たちへのメッセージを聞いた。「この学科は、実践的に国際農業開発について、国際協力の現場経験が豊富な先生方からの直接的な指導を受けられ、留学生との英語ディスカッションを交えた講義で多くの刺激があり、価値観の多様さを知ることができ

東京農大 東方経済ラウンドに初参加

ロシアの大学首脳と連携・交流深まる

東京農大は、9月11日〜13日にウラジオストクで開催された「東方経済フォーラム」に初めて参加した。このフォーラムは、ロシア極東部への外国からの投資促進、国際ビジネスの活性化などをテーマにした国際会議で、ロシア、日



セッション終了後に記念撮影に納まる大澤理事長(右から2人目)



本、中国の首脳をはじめ、世界60カ国以上の政府、企業、教育関係者ら5000人超が参加した。本フォーラムは、ロシアのプーチン大統領主催で2015年から始まり、毎年9月にウラジオストクの極東連邦大学を会場として開催されている。東京農大は昨年、極東連邦大学と大学間協定を締結しており、極東連邦大学の強力な後押しで参加が実現した。日本からの参加大学は従来、日ロ大学協会の会員である北海道大学など3大学で、同協会に未加盟である大学の参加は、異例となった。

本学の参加メンバーは、大澤貴寿理事長、高野克己学長、上田勉理事・理事長室長、手島秀樹事務局長の4人。大澤理事長は、「アジア太平洋地域の高等教育での協力におけるAPEC会議」の第3

セクションにパネリストとして登場し、本学が進める産学連携の具体的な事例を発表した。写真⑥。13日には、安倍晋三首相が日本から参加している企業、大学を招いての懇談が行われた。大澤理事長は安倍首相から参加の感想を聞かれ、大きな収穫があったと成果を述べた。

上田理事・理事長室長は、「今回のフォーラム参加を通して極東連邦大学との連携がさらに深まり、また、それ以外のロシアの参加大学首脳とも交流できた。今後の発展につながる」と語った。

収穫祭 技あり—
行列対応に「味噌」「蜂蜜」売り場

世田谷キャンパスの収穫祭で毎年多くの人が詰めかける「味噌」と「蜂蜜」の売り場では、1、2時間待ちの行列が珍しくない。待ち時間のストレスを軽減しようと奮闘する学生の連携があればこそ、不動の人氣が保たれている。

先頭と最後尾の位置を示す商品リストを配ってあらかじめ希望の品の目星をつけてもらう案内役が行列を回り質問に答える——と、じつに細やかだ。

列の先頭に立ったら注文、会計、受け取りと順に進んでもらう。横には「購入する量や種類によってお渡しする順番が前後することがあります」という表示も。上手にシステム化された運営が行列を確実に短くしていく。

ハチミツ研究会は、今年から販売方法を変更した。深夜から正門前に並ぶ人が増えたため、先着順の販売を一部やめ、午前8時までに並んだ人には整理券を配布。購入できる順番をくじ引きで決める方式を採った(午前8時以降に並んだ人は先着順)。近隣の迷惑や並ぶ人の健康に配慮したものだ。

「びっくりなしの来客で、時には収拾がつかないこともあります」と嬉しい悲鳴も上がるが、現場はスムーズ。目立った混乱はない。

こうした「技あり」の行列対応も、隠れた名物といえるだろう。



わかりやすい看板で行列を導く「味噌」売り場



商品リストで店頭も混乱なしの「蜂蜜」売り場

新しい「栄養強化米」の開発・実用化へ

現代人の栄養代謝の改善に
「東京農大ブランド米」を応用生物科学部
農芸化学科

教授 辻井 良政

現在、糖尿病や脂質異常症といった生活習慣病が増加しており、関連医療費は年間8・4兆円を超え、喫緊の課題となっている。こうした

デルラット群で、肝臓で脂質代謝が改善し、脂肪蓄積が顕著に低下することを見いだしている。しかし、日本ではコメ消費量は減り続けており、玄米を主食として普及していくような活動が必要である。

私には、本課題の研究リーダーとしての役割と食品化学分野に関する部分を担当する。通常、玄米は

精米よりも平均して8倍程度鉄分を多く含むが、多くが吸収しにくいフィチン酸鉄の形態である。開発する栄養強化米には、鉄やマンガンが多いがこれらを炊飯過程で腸管から取り込みやすい形態にする必要がある。炊飯の温度、時間および圧力など物理化学的な方法

で、フィチン酸と金属の結合を弱め、遊離ミネラルを増加させる炊飯条件を検討する。また、発芽玄米のように内在のフィチン酸分解酵素(フィターゼ)を活性化して金属を遊離させる方法も検討する。これにより、玄米からの鉄分やその他のミネラルの吸収量を高める方法の開発を目指している。

アメリカ南部スタイルの
「こだわり食材、朝食

「egg東京農大世田谷通り店」オープン



店舗概要

【店舗名】 egg東京農大世田谷通り店
【所在地】 〒158-0098 東京都世田谷区上賀茂2-4-28 東京農業大学「食と農」の博物館1F
【電話番号】 03-3706-0151
【店舗規模】 52席/総面積44坪
【営業時間】 平日9:00~17:00 (12月~3月16:30閉店)
土日祝8:00~17:00 (12月~3月16:30閉店)
【定休日】 館の閉館日に準ずる

を、責任をもって美味しく調理して提供する」をコンセプトとしたegg東京農大世田谷通り店が地域住民に愛される店になればと語った。

「egg (エッグ)」は、アメリカ南部スタイルの伝統的な朝食が終日楽しめるとして、2005年

豊受大神宮に
収穫祭成功を祈願

にニューヨークブルックリンで人気となった。今後はファーム・トゥ・テーブルの先駆者であるeggと、東京農大がコラボレーションした商品開発などを実施していく計画となっている。



オープニングセレモニーであいさつするジョージ・ウェルド氏(左)



研究室で実験を行う辻井教授

兄・紀明さん(右)と弟・卓二さん、
笑顔の兄弟「ツーショット」活躍する
卒業生東京都立農芸高等学校・
校長(H25~)

小堀 紀明

(S57年3月 農芸化学科卒業)

東京都立瑞穂農芸高等学校・
校長(H30~)

小堀 卓二

(S60年3月 農学科卒業)

農学を学びたいという人の進路の一つとして、東京農大が挙げられることは多い。創設以来「人物を畑にかえす」「実学主義」といった建学理念のもと、農学の総合大学として教育研究を進める東京農大も、農学に興味関心のある人を求めている。例年、農業関係高校から東京農大へ進学を決め、農学を学ぶ人もおり、東京農大と深いつながりがある農業関係高校といえるだろう。

現在、東京都内には農業関係高校が8校あり、そのうちの二つ、東京都立農芸高等学校(杉並区)で現在校長を務めるのが、昭和57年・農芸化学科卒業の小堀紀明さんだ。

「校長先生」兄弟
——未来は無数に存在

学生時代は授業、研究室、収穫祭実行本部など、大学での諸活動にどっぷり浸かった生活だったという。

卒業までに取得した単位数は200を超えるが、その裏には研究活動で行き詰まる時期もあった。無駄なことをやっていたかもしれないと思えて自信を失いかけたとき、研究室の先輩から「農学の分野は広い。一部の優秀な人がすべてを極めることはできない。必ず未開のものがあり、それを研究することが私たちの役目。無駄なことはひとつもない」と言われたことが、現在の教員生活にも影響している。かつての自分を重ね、

教えるたちに「可能性を信じて」と伝えている。

その背中を追いかけるように、今年度から東京都立瑞穂農芸高等学校(西多摩郡)の校長に就任したのが、同窓の弟・小堀卓二さん(昭和60年・農学科卒業)だ。ともに東京農大出身の「校長先生」兄弟である。同じ時代、同じ分野で、二人はともに未来を作り出す仕事に邁進している。

「農学の分野が大きく広がっているように、高校生・大学生の皆さんの未来も無数に存在しているのだから、やる前から諦めずに、チャレンジして欲しい」と、二人の校長先生は語ってくれた。

豊受大神が学生や教職員をすぐ近くの場所から見守るなか、今年の収穫祭も無事、終了した。

豊受大神は天照大神のお食事を司る守護神とされる。教職員に「神様」と敬われる豊受大神宮はこのたび、研究棟新設工事によりアカデミアセンター前の中庭に「引っ越し」した。

豊受大神が学生や教職員をすぐ近くの場所から見守るなか、今年の収穫祭も無事、終了した。

東京農大の収穫祭は、東京農大の守り神である豊受大神への奉獻式で幕を開ける。開会式と同日の11月1日、世田谷キャンパスに鎮座するお社に厚木キャンパスなどで収穫された野菜や果物を奉納し、収穫祭実行委員長(学長をはじめ各本部長、各委員長が玉串をささげて祭りの成功を祈願した「写真」この儀式が、収穫祭前の習わしだ。

(4)

走「富士山女子駅伝」への出場だ。
平成最後の